

救急センターを併せ持つ、二次診療専門の動物病院。 国際水準のチーム医療と最新の医療設備で動物の命をつなぐ

救急センターを併設する「どうぶつの総合病院 専門医療&救急センター」は、かかりつけ医である動物病院（一次診療病院）では対応できない高度な治療を必要とする動物の診察を行う二次診療病院だ。この施設を運営するのが、ベテリナリアンズシナジーである。米国獣医学協会に認定された専門医が多く在籍し、かつ最新の医療機器を備える同院は、動物（犬・猫）に国際水準の高度な医療を提供している。



代表取締役社長 安藤 純氏

- 代表者 代表取締役社長 安藤 純
- 創 業 平成19年8月
- 設 立 平成22年8月
- 資本金 3,000万円
- 従業員数 138名（非常勤勤務含む）
- 事業内容 専科と救急センターを持つ二次診療の動物病院「どうぶつの総合病院 専門医療&救急センター」の運営
- 所在地 〒333-0823 埼玉県川口市石神815
TEL 048-229-7390 FAX 048-229-7396
- U R L <https://vsec.jp>

埼玉県川口市、高速道路の川口ジャンクションからほど近くの国道沿いに、今年3月建物が新築された「どうぶつの総合病院 専門医療&救急センター」がある。犬・猫を専門とし、内科、外科、神経科、循環器科、皮膚科、麻酔科・ペインクリニック、病理科、放射線腫瘍科等11の診療科の他、救急センターを併せ持つ総合病院だ。

専科診療は、かかりつけの動物病院（一次診療病院）から紹介された動物を診療する二次診療病院の役割を担う。救急センターは緊急性の高い動物を受け入れ、治療を行ったあと同院の専科診療やかかりつけ病院に診療を引き渡す役割を担っている。

この動物病院を運営するのがベテリナリアンズシナジー株式会社である。

「当院は専門科が分かれています。多くの科で、アメリカで専門医の資格を取った獣医師が主任として在籍し、各科で連携しながら治療に当たっています」（安藤純社長）

世界でトップクラスの水準を誇るアメリカの獣医学。その米国獣医学協会の専門医資格を持つ専門医が、最先端の医療設備を用いて高度な医療を提供する

——それが同院の強みである。その二つの武器で、一次診療病院では対応できない難しい治療を要する動物を受け入れて、地域の動物病院、動物たち、そして飼い主のために力を注いできた。

→ 地域の獣医師が集まり二次診療病院を開設

平成19（2007）年、川口市で夜間診療を行う動物病院を待望する声が高まり、地域で一次診療を担っていた獣医師らが有限責任事業組合を立ち上げた。そして「埼玉南部夜間救急動物病院」を開院し、交代で勤務しながら夜間の救急診療を始めた。これが同院の前身となる。安藤社長も自身の動物病院を運営しながら、事業組合の立ち上げに関わった一人だ。

やがて、時代とともに飼い犬や飼い猫が“ペット”から“家族の一員”という関係に移り変わると、動物にも人と同等の医療が求められるようになっていった。時代の要請に応え、かつ幅広い科をカバーしながら日々の治療を行っている地域の動物病院を支えるため、埼玉南部夜間救急動物病院では夜間診療と併せて内科、外科など診療科を分け、各科で特化した専門診療

を行う総合病院の開院を急いだ。

平成22年、組織を現在の株式会社に改組し、安藤社長が代表に就任。そして、救急診療と専門医療の両輪で動物を救う「どうぶつの総合病院 専門医療&救急センター」を開院した。

「日本で飼われている犬や猫の治療の9割以上は、一次診療の動物病院が担っています。当院はかかりつけ動物病院からの紹介で動物を受け入れ、特殊な検査や専門治療を行い、再びかかりつけの動物病院に治療を渡していく。それが仕事です」

現在、一次診療病院のエリアは埼玉を中心とした関東が中心だ。しかし、最先端の医療機器と専門医を有する同院の評判を聞きつけ、北海道から九州まで幅広く検査・治療の依頼があるという。

➔ 最先端の治療を行う各科の特徴

同院の内科は消化器、呼吸器、内分泌、免疫、血液などの疾患を幅広くカバーする。X線、CT、MRIなどの画像を画像診断科と連携して分析。さらに病理科の生検の結果などと合わせて診断を行い、適切な治療につなげている。

循環器科は心電図検査、胸部X線検査、心臓超音波検査、CT検査等各種検査を駆使し、内科治療、カテーテル治療、ペースメーカー治療、外科治療など、動物にとって最善の治療法を決定していく。

外科は胸部、腹部、泌尿器および整形などの疾患やケガに対応し、麻酔科と連携して多様な手術を行う。また、術後集中的なケアが必要な場合は、ICUスタッフとタッグを組んで24時間体制で対応する。

そして、今年7月に診療を開始した放射線腫瘍科には、世界でも数台しか動物病院に導入されていない放射線治療装置の最新機種が設備されている。

「CTやMRIなどの機器は動物専用のものがないため、人に使うものを使用しています。今回、放射線腫瘍科に導入した最新機種は、世界でも動物病院には数台しか設備されていないもので、すぐに予約が埋まってし

まう状態です。この放射線治療装置は放射線をがん照射して治療を促すものですが、正常組織に当てると逆にがんを作ってしまいます。当院には、経験を積んだ放射線腫瘍専門医と放射線技師が在籍しています」

安藤社長曰く「たとえ最先端の治療器であっても、正確に操作できる人材がいなければ最善の治療にはたどり着けない」。つまり、同院のように放射線腫瘍の専門医と技師が二人三脚で治療に臨むことで初めて治療の効果が表れてくるのだ。



こうした優秀な獣医師ら人材獲得の裏には、同院のチーム医療向上に向けた安藤社長の熱い思いがあった。

➔ 国際水準のチーム医療を提供する体制

「私は自分の動物病院で診察していた時に、頼りになる二次診療病院があれば診療がしやすくなるだろうな、と思っていました。ですから、欧米のような専門医が活躍するセンター病院を作るというのは設立当時から決めていた。そこで、ネットワークを生かしたり評判を聞きつけては海外に行き、優秀な人材に声をかけて来てもらったのです」

同院の病院長で神経科の主任・金園晨一氏は、アメリカの大学でレジデントを修了し米国獣医神経科専門医等の資格を持つ神経科の専門医だ。これまでに脳・脊髄腫がん、脊椎骨折等の神経内科、神経外科分野で難しい症例の動物を数多く救ってきた。

放射線腫瘍科の主任・塩満啓二郎氏も、アメリカの大学の放射線腫瘍科レジデントを修了し、米国獣医放射線学専門医の資格を取得。ルイジアナやフロリダの大学で准教授を務めたキャリアを持つ。



放射線治療装置



外科手術の様子

他にも同院には、アメリカの獣医学専門医の資格を持つ主任が数多く在籍する。いずれも安藤社長の熱意に共感して集まった人材だ。

さらに令和4年から国家資格となった動物病院の看護師（愛玩動物看護師）らも加わり、“国際水準のチーム医療を提供する”を旗印に、キュア（治療）とケア（看護）の両輪で、ケガや病気で苦しむ動物を手厚くサポートしている。

➔ 獣医師育成に貢献する教育プログラム

農林水産大臣指定の臨床研修診療施設である同

院は、次の時代を担う獣医師を育てる獣医学教育にも力を注いでいる。

獣医学部の学生を受け入れる「学生インターンプログラム」の他、卒業後5年以内の獣医師を対象に行う「全科インターンプログラム」、他病院に勤務しながら研修を希望する獣医師を対象とした「専科研修医制度」。さらに、国際的に認められたレジデントプログラムまたは同等の技術を身につけることを目的とした獣医師の「専科レジデントプログラム」といった、同院独自の教育プログラムもある。

「おそらく来年からアジア獣医学会内にさまざまなレジデント制度が設置され、これに対応できるよう病院としてレジデント教育が始まる予定です。当院では内科・神経科・循環器科が認定される予定です。さらに米国の制度に沿ったレジデント教育が始められる可能性もあります。今後も国際水準の医療を行うため専門医を育てていきたいです」

➔ 救急センターが年内竣工予定

現在、同院の救急センター施設の新設工事が行われており、建物は年内に完成する予定だ。新施設が完成すると、救急センターの処置室から内科、外科、麻酔科等各科の診療室が一直線の廊下でつながり、1分1秒を争う医療現場において診察、検査、外科的処置、ICUといった各科の連携した対応がよりスムーズにスピーディーに行えるようになるという。

「この先、優秀な専門医に巡り合えれば、新たな診療科を開設することも考えています。また将来的には、例えば第1内科・第2内科というような各科複数体制にして、より多くの動物の命を救っていききたいです」

今後も同院は一次診療病院と連携を密にして、かかりつけ医での治療がスムーズに行えるよう情報を共有、動物にとって最善の治療環境を整えていく考えだ。動物の命を救うため、同院の挑戦と医療現場での闘いは続く。